



TITLE:

マルクスの国際価値論 (経済学部創立50周年記念号1)

AUTHOR(S):

松井, 清

CITATION:

松井, 清. マルクスの国際価値論 (経済学部創立50周年記念号1). 経済論叢 1970, 105(4-6): 135-153

ISSUE DATE:

1970-04

URL:

<https://doi.org/10.14989/133387>

RIGHT:

經濟論叢

第105卷 第4・5・6号

經濟學部創立50周年記念號 1

勞働力創出要因としての高蓄積……………島	恭彦	1
マルクスの國際価値論……………松井	清	31
ドイツ・ファシズムの社会的基盤……………大野	英二	50
イギリス労働組合運動と「労働者管理」……………前川	嘉一	79

昭和45年4・5・6月

京都大學經濟學會

マルクスの国際価値論

松 井 清

I は じ め に

わたくしはこれまで幾度かマルクスの国際価値論について言及し、その結論とでもいうべきものを、1963年の『世界経済論体系』第一章に集約している¹⁾。その間社会主義諸国のマルクス経済学の文献には、マルクスの国際価値論について若干言及したものがあったが、これを体系的に取扱ったものは、ほとんどなかったといっても差支えない。ところが1962年の、ドイツ科学アカデミーの発行している『経済学年報』第5巻には、マルクスの国際価値論についての100頁余にわたる大論文が発表せられた²⁾。思うにこれは価値論の研究が国内から世界市場にまで発展されたという理論的な理由と、社会主義世界市場の拡大にともなって社会主義世界市場価格の基準となるべき国際価値が探究されなければならないという実際の理由に基くものであろう。現にコールマイの論文は「社会主義諸国間の外国貿易における価格形成に対する二三の結論」という副題をつけている。

コールマイはこの論文の最初の部分で、これまでのブルジョア文献において、マルクスの国際価値論が殆んど問題として取上げられなかったことについて、やや怒りを含んで言及している。ドイツ語で書かれた「国際貿易論」の定本ともいふべき、ハーバラーの *Der internationale Handel* には、マルクスの名は一度も出てこない。また有名な論文集 *A Survey of Contemporary Economics*

1) 松井清『世界経済論体系』(日本評論社), 1963。

2) G. Kohlmei: Karl Marx' Theorie den internationalen Werten mit einigen Schlußfolgerungen für die Preisbildung im Aussenhandel zwischen den sozialistischen Staaten, in *Probleme der politischen Oekonomie*, 1962 (邦訳は柴田国弘助教授による、未公開)。

に国際貿易論を寄稿しているロイ・A・メッツラーもマルクスの名には全然ふれておらない。B・オリーンの大著『地域貿易と国際貿易』についても同様である。戦後の国際貿易に関する著名な論文を集大成したともいふべき *Readings in the Theory of International Trade* においても、マルクスは完全に無視されている。コールマイはこの事実を、「これは、ブルジョア的・資本主義的学説史がマルクスとかれの業績を無視する百千の例のひとつにすぎない。」³⁾とのべている。

こうしたブルジョア経済学の傾向に対して、コールマイはマルクス経済学の立場にたって、国際価値論を体系化しようとする。「国際価値、世界市場価格等々にかんするマルクスの所見は、『資本論』『綱要』『剰余価値学史』その他の諸労作中に散見される。周知の如くマルクスは資本主義生産様式の一般的研究ののちに、資本主義の外国貿易と世界市場の特殊法則を叙述する意図をもっていた。」⁴⁾ まことにコールマイの労作は、第二次世界大戦後、社会主義諸国の文献中にあらわれたマルクス国際価値論の最初の体系的研究であるといつてよからう。ところが日本においては戦前あるいは戦時中からこの問題に関する研究が、かなり進んでいた。名和統一教授、朴克采教授、それにわたくしなどの研究がそれである。何故日本にマルクス国際価値論の研究が進んでいたのだろうか。第一に考えられることは、それまでに、日本資本主義に関する研究がかなりの水準に達しており、より以上の発展のためには国際的関連に進まなければならないことが、第二に日本資本主義の貿易依存率が高く、日本資本主義の研究そのものにとっても、国際的関連をみる必要であったこと、などによるものであろう。ちなみにわが国における研究の成果は、木下悦二教授編の『論争・国際価値論』⁵⁾に要領よくまとめられている。

この小論の目的は、新しいコールマイの研究を参照しながら、わたくしのこ

3) G. Kohlmey: *a. a. O.*, S. 19.

4) G. Kohlmey: *a. a. O.*, S. 20.

5) 木下悦二編『論争・国際価値論』(弘文堂), 1960.

れまでの研究に反省を加えることである。そのためこれまで発表したものと若干重複するところのあることについてはあらかじめおことわりしておきたい。

II 価値法則のモディフィケーション

国際価値という言葉は、ミルもこれを使用しているが、その内容はマルクスのそれとは異っている。マルクスが国際価値についてのべているところを、『経済学批判』、『資本論』、『剰余価値学説史』などから拾い上げてみよう。そして、それらを単純商品生産を仮定した場合、貨幣を導入した場合、さらにすすんで、生産価格論の段階について、おのおの考察を加えよう。『剰余価値学説史』において、マルクスはつぎのように書いている。「リカードの理論を観察してさえも、一国の三労働日が他国の一労働日と交換されうる。価値法則は、この場合、本質的な変形を蒙る。いいかえれば、一国内において熟練労働・複雑労働が、不熟練労働・簡単労働に対して有するのと同じような具合に、諸国の労働は互に関係しあっている。この場合においては、富国が貧国を搾取するのであって、このことはジョン・スチュアート・ミルもまた彼の著『若干の未解決問題云々』において述べているように、貧国がその交換によって利得する場合においてさえも、そうである。」⁶⁾ この場合マルクスは、リカードの説に言及している。リカードは、後の人によって「比較生産費説」と呼ばれる説を提唱し、この説はその後ミルその他の人々によって継承され、今日のハーバラーにまでいたっているのである。そこでマルクスに入る前に、まずリカードの説を取上げよう。リカードは次のような設例によって問題を説明する⁷⁾。

	ブドウ酒一単位を生産 するに必要な労働時間	ランチャー単位を生産す るに必要な労働時間
ポルトガル	80	90
イギリス	100	120

この数字はポルトガルがイギリスに対して、いずれの部門においても、生産

6) マルクス『剰余価値学説史』（マル・エン全集、第11巻）、285頁。

7) リカード『経済学及び課税の原理』（岩波文庫）、120頁。

力の絶対的優位をもつということ、しかし葡萄酒生産において相対的に優れているということを意味する。この仮定が成立するためには、第一に一国の内部においては、労資の移動が自由に行なわれ、生産条件の均等化が行なわれるのに対して、国際間では労資の自由な移動が行なわれず、生産条件の均等化が存在しないこと、したがって国際間の生産力格差は、たんに絶対的にのみでなく、相対的にも存在するという条件が必要である。この場合リカードは、両国の間に商品交換が行なわれ、しかもこの外国貿易によって両国ともに利益するというのである。ところでいまその生産に80労働時間を必要とするポルトガルの葡萄酒が、120時間を要するイギリスに輸出されるということは理解できるが、その生産に100時間を要するイギリスのラシャが90時間しか必要としないポルトガルに輸出されるのは、一見はなほだ奇異に感じられる。その理由としてリカードのあげているところは、ポルトガルにとっては、生産力の相対的に優れた葡萄酒の生産にすべての労働・資本を集中し、その一部分をさいてイギリスに輸出し、それと交換にラシャを輸入した方が有利であり、イギリスにとっても、生産力の相対的にすぐれたラシャの生産にすべての労働・資本を集中し、その一部分をさいてポルトガルに輸出し、それと交換に葡萄酒を輸入した方がより有利であるというにある。ところでこの場合両国間で貿易が開かれ、ポルトガルが葡萄酒の生産にイギリスがラシャの生産に専門化するためには、ポルトガルの特定労働時間に含まれた特定労働量が、国際的により高い価値（価格）に、イギリスの同一労働時間に含まれた労働量が国際的により低い価値（価格）に評価されねばならぬ。両国の同一労働時間のうちに含まれた労働量が、そのまま同一価値を有し、同一の価格で表現されるとすれば、100の価格のものが、90の価値の支配する国へ輸出されるということは考えられない。いうまでもなく資本主義社会における分業は、商品価格を通じて行なわれるのであり、特定の生産に専門化することの有利、不利は商品の価格を通じて以外にはこれを知ることとはできないのである。しかも一国内においては、同一労働時間に含まれる社会的労働の量は、同一価値を有し、同一価格をもって表現さ

れるのであるが、当面の問題である国際間ではそうでない。これはマルクスが価値法則のモディフィケーションと呼んだ問題であり、世界市場では、このように価値法則がモディファイされるため、問題が複雑化されるのである。リカードはせっかく問題の入り口まで辿りつきながら、その労働価値説の不正確さのために、正しい解決をおこなうことができなかった。周知のように、リカードには、抽象的人間労働、簡単な平均労働の概念がなく、ただ具体的労働だけが問題だったにすぎない。商品交換を通じて労働の等質化がおこなわれ、かく等質化された人間労働こそ、価値の実体となるものであるというマルクスによって発見された真理に、リカードは気がついていない。そのためリカードは価値の国際的比較を断念し、両国内における交換比率の相違（比較生産費）から国際貿易の成立を説明しようとしたのである。このように価値の国際的比較を断念することによって、生産力の高い国と低い国との間に行なわれる貿易が、両国に相対的利益をあたえながら、絶対的には富国による貧国の搾取をとまなっているという事実を抹殺する。

III マルクスの国際価値論

さきに引用したマルクスの言葉においてまず問題になるのは、一国の三労働日と他国の一労働日が交換されるのが、何故に価値法則のモディフィケーションになるかということである。リカードの例によるとポルトガルの葡萄酒一単位（80労働時間）とイギリスのランシャー単位（100労働時間）が交換されるような場合である。一国内部における熟練労働、不熟練労働、簡単労働と複雑労働の関係については、マルクスは次のように書いている。「複雑なる労働は要するに、簡単労働の強められたもの、或は寧ろ倍加されたものにすぎぬのであって、少量の複雑労働は多量の簡単労働に等しきものとなる。この換算がたえず行われることは経験の示すところである。ある商品は最も複雑なる労働の産物であるかも知れない。しかもその価値によって、それは簡単なる労働の生産物と等しからしめられ、かくしてまた簡単なる労働の一定量を代表するにすぎ

ぬものとされる。種類の相異った各労働がその尺度単位としての簡単労働に換算される様々の比例は、生産者の背後における社会的行程によって定められるものである。⁸⁾ この引用からも明らかなように、たとえば簡単労働の三労働日と複雑労働の一労働日が換算されても、それが一国内であるなら、むしろその事実こそ価値法則の貫徹を意味するのであり、なんら価値法則のモディフィケーションではない。それが二国間では何故モディフィケーションといわれねばならないのか。

まず注意しなければならないことは、いま国際間の問題についてマルクスのいっている三労働日、一労働日は決して具体的あるいは個別的労働ではなく、それぞれの国の社会的平均労働についてであるということである。その社会的労働についてマルクスは次のようにいっている。「もし一商品の価値がその生産中に支出された労働の分量によって規定されているとすれば、ある人が怠惰であり不熟練であればあるほど、かれはその商品の仕上げにそれだけより多くの時間を要するというわけで、かれの商品はそれだけ価値が多いかに思われるかもしれない。けれども諸価値の実態をなす労働は、同等な人間労働であり、同じ人間労働力の支出である。商品世界の諸価値で表示される社会の総労働力は、無数の個人的な諸労働力から成立しているとはいえ、ここでは、一個同一の人間の労働力として意義をもつ。これら個人的な労働力は、いずれも、それが、一つの社会的平均労働力たる性格をおび、かつかかる社会的平均労働力として作用し、したがってまた、一商品の生産において平均的に必要な・あるいは社会的に必要な・労働時間を要するにすぎぬ限りは、他と同じ人間の労働力である。社会的に必要な労働時間とは、現在の社会的・平均的な生産条件と、労働の熟練および強度の社会的な平均度をもって、何らかの使用価値を生産するために必要とされる労働時間である。」⁹⁾ マルクスは一国の内部で形成される社会的平均労働を国民的平均労働と名づけている。さきに問題となったように、

8) マルクス『資本論』（日本評論社版）、第一巻第一分冊、191-92頁。

9) 同上、180頁。

一国の三労働日が他国の一労働日と交換されるというとき、マルクスはこのような国民的平均労働をさしているものと考えねばならぬ。それでは二国以上の国民的労働が、相互に一国内の複雑労働と簡単労働のように関係しあうというのはどのようなことであろうか。国民的平均労働は、すなわち抽象的人間労働であって、等質であるべき人間労働が二つ以上存在するというのは、ちょっと奇異に感じられる。けれどもさらに立入って考えてみると、つぎのような事実が存在することがわかるはずである。マルクスは「簡単な平均労働そのものは、なるほど異なる国々および諸文化時代においてその性質を変ずるが、しかし、ある当面の社会ではあたえられている。」¹⁰⁾とのべている。だからこそともに等質なる人間労働たるべき一国の国民的平均労働が、他国の国民的平均労働と、あたかも一国内における複雑労働と簡単労働とのように相互に関係しあうのである。この関係は国際商品交換の発展につれて、しだいに発展してゆく。そしてそこにマルクスが世界的平均労働と名づけた世界的規模における抽象的人間労働が形成されてゆく。ところでこのように世界的平均労働が形成されてゆくけれども、世界市場における商品交換の発達には、種々の理由から国内市場におけるように普遍化していない。国境は依然として存在し、そのため世界的平均労働の形成は、なお不完全であるといわねばならぬ。世界的平均労働とならんで国民的平均労働が問題となるのはそのためである。マルクスはこの点についてつぎのようにのべている。「どの国においても或る特定の中位の労働強度があるのであって、それ以下の強度の労働は、商品の生産にさいし社会的に必要な時間以上の時間を消費し、したがって標準的な質をもつ労働としては計算されない。ある与えられた国では、労働時間の単なる長さによる価値の度量を変更するものは国民的平均以上に高い強度のみである。個々の国をその構成部分とする世界市場では、これと異なる。中位の労働強度といっても国々で相違している。ある国ではより大きく、他の国ではより小さい。かくして、これらの国民的平均は一つの段階をなしているものであって、その度量単位は世界的労働

10) マルクス『資本論』同上、191頁。

の平均単位である。かくして、強度のより大きな国民的労働は、強度のより小なるそれに較べて、同等な時間内に、より多くの貨幣で表現されるところのより多くの価値を生産する。」¹¹⁾ もしも世界市場が国内市場のように完全なものであれば、一定の中位的な労働の強度ができあがり、商品の生産に支出される労働の強度がこの水準以下であるときは、その商品は社会的に必要な時間以上を要し、したがって標準的品質の労働としては計算に入らぬはずである。ところが現実の世界市場はそれほど完全でない。世界的平均労働が形成されながら、まだ各国の国民的平均労働が存在し、おのおのの国民的平均労働は一つの段階をなしている。ここにマルクスが『資本論』第三巻で展開した市場価値と個別価値の理論を、世界市場に適用すべき根拠がある。要するにマルクスが価値法則のモディフィケーションと呼ぶところのものは、生産力の国際的な不均等から生ずる国内価値と国際価値の背離であって、この法則の光をもって照らすとき、はじめてリカードの比較生産費説は、その正しい姿をあらわすものということができる。

IV 貨幣の導入

国際商品交換がしだいに発展してくると、一つの商品＝金が他の一切の商品から排除され、一般的な等価形態となり、貨幣となる。これが世界貨幣である。世界貨幣を導入するとき、これまで述べてきた国際貿易の法則はどのようになるか。つぎにそれについて考えてみよう。

生産力の国民的差異は、もちろん金の生産についても存在する。一定量の金を生産するのに、生産力の高い国では一労働日しか必要とせぬのに対して、生産力の低い国では三労働日を必要とする。この場合、一労働日、三労働日というのは、あのおのの国の社会的平均労働の持続時間をいみしていることはもちろんである。このことは別の言葉で表現すれば、同一の労働時間をもって、生産力の高い国ではより多い金量を、生産力の低い国ではより少ない金量を生産す

11) マルクス『資本論』第一巻第三分冊、191-92頁。

るということになる。リカードの設例を次のように変更してみよう。

	葡萄酒一単位を生 産するに要する労 働時間	ランチャー単位を生 産するに要する労 働時間	金一単位を生産す るに要する労働時 間
ポルトガル 国内価値	80	90	90
国際価値	88.8	100	$100\left(90 \times \frac{10}{9}\right)$
イギリス 国内価値	120	100	110
国際価値	109	90.9	$100\left(110 \times \frac{10}{11}\right)$

いま世界貨幣が同一の国際価値をもつにいたった結果、それぞれの国の葡萄酒、ランチャー部門における生産力格差の如何に拘らず、その格差は金生産部門における格差をもって表現される。それは各商品ともに金との交換を通じてその価値（価格）表現をうけるからである。

その結果ポルトガルの葡萄酒の国際価値は 88.8, ランチャーの国際価値は 100, イギリスの葡萄酒の国際価値は 109, ランチャーの国際価値は 90.9 となり、葡萄酒はポルトガルからランチャーはイギリスから輸出される状態となる。

マルクスは国内価値から国際価値への転化を次のように説明している。「ところが国際価値は、その国際的適用においては、つぎのこと——すなわち、世界市場においては、より生産的な国民的労働は、そのより生産的な国民的労働が競争によってその商品の販売価格をその価値にまで引下げられることを余儀なくされるのでないかぎり、やはり強度のより大きな国民的労働として計算されるということ——により、さらに一層修正される。」「一国において資本制生産が発展しているのと同じ割で、その国では、労働の国民的な強度および生産性も国際的水準以上に高まっている。かくして相異なる国々において同等な労働時間で生産される同じ種類の商品の相異なる諸分量は不等なる国際的諸価値を有するのであって、それらの諸価値は相異なる諸価格で、すなわち国際的諸価値の如何に応じて相異なる諸貨幣額で、表現される。かくして貨幣の相対的価値は、資本制生産様式の発展せる国民のもとでは、それが未発展な国民のもとでよりも小さいであろう。したがって、貨幣で表現される労働力の等価たる

名目的労賃もまた、第一の国民のもとでは第二の国民のもとでよりも高いであろうということになる。だが現実的賃銀、すなわち労働者の自由処分に委される生活手段についてみても、そうだというわけでは決してない。¹²⁾ マルクスは、この場合、国際間の貨幣の相対的価値のちがいを、労働生産力のちがいから説明している。あらためてことわるまでもないことであるが、金を生産しない国については、右のような過程が廻り道をして実現される。その点にかんしマルクスは次のようにのべている。「金や銀を生産する国においては、一定の労働時間が直接に金や銀に体化するし、一方金も銀も生産しない国では廻り道をして——一国商品を、すなわち国民的労働の一定部分を、鉱山所有国の金や銀の一定量と、直接または間接に交換することによって、同じ結果に立ち至る。¹³⁾

V 市場価値、国際市場価値

マルクスは各国の商品は、その生産条件のちがいによって相異なる国際価値を有するとのべている。だから国際価値が世界市場価格の基準になるという場合、それはこれらの相異なる国際価値の平均値たる国際市場価値でなければならない。マルクスの市場価値についての規定の次のとおりである。「市場価値は一面では、ある部面で生産された諸商品の平均価値とみなさるべきであり、他面では、その部面の平均的条件の下で生産され且つその部面の生産物の大量をなす商品の個別価値とみなすべきであろう。」¹⁴⁾ 一商品の取引が世界的に行なわれ、その商品についての世界市場が成立する以上、各国で生産される当該商品の平均値というみでの国際市場価値は成立する。けれども平均的条件の下に生産され、その部面の生産物の大半をなす商品の個別価値というみでの国際市場価値は、資本と労働の移動が不自由な世界市場では成立しがたい。資本主義の発展は、次第に労働・資本の移動を盛んにし、生産条件を平均化するこ

12) マルクス『資本論』（日本評論社版）、第一巻第三分冊、495頁。

13) マルクス『経済学批判』（マル・エン全集）、第七巻、455頁。

14) マルクス『資本論』（日本評論社版）、第三巻第二分冊、71頁。

とはたしかであるが、同時にそれを阻止する傾向も強い。だからたまたま一国のもつ生産条件が、平均的生産条件に一致するとしても、それは偶然に近いといえることができる。各国の生産条件は平均化せられず、一つの段階をなして相互に関係しあっている。国際市場価値について特異な点は、国内の市場価値の場合、必らずそれと一致する個別価値が存在するのに対し、必らずしもそのような個別価値が存在しないということである。各国の個別価値は国際市場価値（価格）から背離する。

個別価値が市場価値から背離するということ、そのことはなんら価値法則のモディフィケーションをいみするものではなく、むしろ市場価値以上および以下の個別価値が存在し、全体として総価値が総価格に一致するということは、価値法則の貫徹にはかならない。いま世界市場で各国の個別価値が市場価値から背離することが、なぜ価値法則のモディフィケーションになるのであろうか。それはつぎのように考えればよい。国際市場価値は国際市場価格変動の中心となる。そして国際市場価格が成立すると、同時にそれは各国の国内市場価格でもあるわけである。生産力の高い国の生産者は、全体として国際市場価格よりも低い価値をもって生産を行なうことができるため、一つの超過利潤を実現する。これにたいして生産力の低い国の生産者は、全体として国際市場価値以上の価値で生産を行なっているため、自国労働の一定部分の価値を実現できない。この場合両国において、ともにやはり総価値と総価格は一致していないのである。ただ注意しておきたいことは、このさいでも世界市場全体としてみれば、総価値は総価格に一致しているのである。したがって価値法則のモディフィケーションということは、決して価値法則の貫徹を否定しているものではないということである。

以上の点を念頭においてミルの国際価値論との比較を試みよう。二商品の国際価値が、競争によって、葡萄酒95、ラジャ95となったとしよう。そうすると、さきに展開したリカードの設例は次のようになる。

		葡萄酒	ラジャ
ポルトガル	国内価値	80	90
	国際価値	88.8	100
	国際市場価値	95	95
イギリス	国際価値	109	90.9
	国内価値	120	100

この場合葡萄酒はポルトガルから輸出されている。ラジャはイギリスから輸出されている。ミル流の表現をとれば交換比率は1:1である。この国際市場価値において、両国の二商品にたいする需給は均衡している。いまポルトガルの輸出品である葡萄酒にたいするイギリスの需要が減少したとするなら、国際需給は不均衡となり、均衡を回復するためには、ポルトガルは葡萄酒の価格を引下げなければならない。その価格を例えば90であるとしよう。いま二商品の交換比率は $1:\frac{90}{95}$ となり、新たに成立した国際市場価値は、相対的にいってイギリスにとって有利である。ここにおいてはじめて、ポルトガルの供給する葡萄酒と、イギリスの供給する衣服とは価額において相互に均衡しあう。反対にイギリスの輸出品である衣服にたいするポルトガルの需要が減少した場合には、反対の結果がうまれる。いま十分な需要を確保するために価格を引下げねばならぬのはイギリスである。その価格を93とするならば、新なる国際市場価値における二商品の交換比率は $1:\frac{95}{93}$ であり、この国際市場価値は相対的にポルトガルは有利である。国際需給は均衡し、ポルトガルの供給する葡萄酒とイギリスの供給するラジャは価額において均衡しあう。

このかぎりにおいて、マルクスの労働価値説から出発した場合においても、ミルの場合においても大したちがいはないもののようにみえる。しかしながらよく考えてみると、この場合ミルによって看過された二つの重要な認識をとまっている。第一に国際間で取引される商品は、すべて貨幣にたいして販売され貨幣をもって購買されるものであり、ミルの考えとは異って、その販売と購買とは時間的・場所的・人格的に分離しているということである。したがって

国際需給は、商品の価格運動によって均衡せしめられるとしても、その均衡はたえざる動揺にさらされている。資本主義経済の発展にともなう諸国間の不均等発展は、ますます国際間の不均衡を拡大し、もはやミルの考えたように自動的な機構によっては、これを均衡せしめえないような段階にまでたちいたる。

第二は貿易利益にかんする認識である。すでにのべたように、ミルは貿易をバーターであると考えた当然の結果として、貿易利益を社会生産物の増加—実質所得水準の上昇とみたが、資本主義社会における貿易の直接の利益は利潤の獲得である。貿易によって間接に実質所得水準が上昇する場合においても、それは直接には利潤の追求獲得を通じてである。資本家は安く輸入し、高く輸出して利潤をうることが目的であることは、いうまでもなからう。ところでさきにあげた数例で、国際価格の変動により、あるときはイギリスがより多くの利益を獲得し、あるときはポルトガルがより多くの利益を獲得しているけれども、それはあくまで相対的利益にかんすることであって、絶対的にみるならば、いずれの場合にあっても、生産力の高いポルトガルが、生産力のより低いイギリスの犠牲において貿易からの利益を獲得しているのである。葡萄酒の国際市場価値は90あるいは95であり、いずれの場合も、ポルトガルの国内価値以上、イギリスの国内価値以下に決定されている。ラシャの国際市場価値は95あるいは93であり、これもともにポルトガルの国内価値以上、イギリスの国内価値以下である。しかもこの利益は、リカードやミルの考えているように、消費者の利益となるのではなく、貿易から生ずる超過利潤として、生産力の高い国の資本家の利益となる。その一部は労働者にこぼれて、労働者の実質所得を引上げることもありうるが、それは資本と労働との間における分配率によって決定される。生産力の低い国は相対的に利益しつつも、絶対的には損失をこうむっているが、この損失は、労働者階級の犠牲にしわよせされる。低開発国において、一握りの富裕な買弁資本家がうまれるかたわら、大多数の人民が飢餓線上にあるのは、この事実の表現にほかならない。リカードやミルは、価値の国際比較、労働賃金の国際比較を断念することによって、この重要な事実を看過した。

国際市場価値という概念については、これを認めない学者もある。わが国では、例えば名和教授などがその例であり¹⁵⁾、社会主義諸国にもそれに似た見解がみられる。これらの見解は国際価値と国際市場価値を区別せず、不明確な形で国際価値という概念を用いているのである。世界市場価格の基準を国際価値に求めようとする試みが、社会主義諸国の学者の間にみられるが、マルクスは明らかに「不同の国際価値」という言葉を用いており、そのような不同の国際価値であるならば、世界市場価格の基準とはなりえない。この場合の国際価値は国際市場価値でなければならない。そういったいみで国際市場価値という概念を否定し、国際価値という概念ですべてを処理しようとする見解は、誤りでないまでも、不正確であるというべきであろう。

コールマイは、国際市場価値という概念を肯定するものの一人である。すなわち次のようにのべている。「国際市場においては、個々の国民の国民的労働支出は国際価値に還元される。個別価値が市場価値に変形するように、国民的価値は国際価値に変ずる。国民的市場価値と国際的市場価値が存在する。」¹⁶⁾

VI 生産価格、世界市場価格

国際市場価値は、国際市場価格変動の中心をなすものである。この点についてはなんら説明を要しない。説明を要すのは、市場価値にかかわって生産価格を問題にしようとする場合である。マルクスはつぎのようにのべている。ここで市場価値について述べたことは、生産価格についても、それが市場価値に代位するや否や当てはまる。生産価格は各部面ごとに調整されており、また同様に、特殊の諸事情に応じて調整されている。だが、それ自身は、ふたたび、それをめぐって日々の市場価値が動くところの、またそれに日々の市場価格が一定期間中に平均化されるところの、中心である。」¹⁷⁾ ところでわれわれは、いちおう世界市場では、資本の国際的移動は行なわれないという前提に立っており、そ

15) 名和統一『国際価値論研究』（日本評論社）参照。

16) G. Kohlmeier: *a. a. O.*, S. 37.

17) マルクス『資本論』（日本評論社版）。第三巻第二分冊、73頁。

のため国際市場価値が生産価格に転化することが阻まれているとみななければならぬ。「競争がまず第一に一部面でなしとげるのは、諸商品の相異なる個別価値から、一の同等な市場価値および市場価格を成立させることである。しかるに、相異なる諸部面における諸資本の競争は、はじめて、生産価格、すなわち、相異なる諸部面間の諸利潤を同等ならしめる生産価格を作り出す。後者のためには、前者のためによりも、資本制生産様式の一そう高度な発展が必要である。」¹⁸⁾

世界市場では資本の移動は行なわれないが、国内市場では資本の競争が行なわれ、価値は生産価格に転化している。この生産価格が外国貿易によっていかに変化し、一国の利潤率に影響するか。それがここでの問題である。もし輸出品となるべき商品の生産部門が、その国の有機的構成中位の資本をもって営まれているならば、貿易開始前には価値は価格に一致している。ところが貿易の開始によって生産力の高い国の輸出品は、世界市場でより高い価格を実現することができるのであるから、その部門の利潤率は高まることになる。そのため他の部門の資本が輸出生産部門に流入し、全体としてこの国の平均利潤率は高まる。いまや中位的構成の資本によって営まれるこの生産部門にあっても、生産価格は価値以上となるであろう。この点はだいたいマルクスによって説明されているとおりである。問題は生産力の低い国の場合である。この国の当該商品の価格は、国際貿易の開始によって下落し、生産価格は中位的構成をもって営まれる部門においても価値以下に下落する。その結果、比較的優位にある部門、リカードの例ではイギリスのラシャ輸出が可能になってくる。

かくて国際市場価値の成立によって生ずることは、生産力の高い国の生産価格の騰貴、平均利潤率の上昇、生産力の低い国の生産価格の下落、平均利潤率の下落ということであって、国内の場合のように平均的な生産価格の成立という結果をもたらさない。なぜならわれわれは、いま資本は国際的に移動しないと仮定しているからである。国内のように生産価格を中心として世界市場価格

18) マルクス『資本論』（日本評論社版）、第二巻第二分冊、67頁。

が変動するということはある。この点についても、コールマイはほぼ同様の解釈をしている。「世界経済の資本主義体制においてはなるほど種々の国民的利潤率が世界経済の平均利潤率へ平均する傾向が作用するが、それは有力ではない。」¹⁹⁾「第一の論拠は資本主義世界経済が支配的工業国と従属諸国または植民地的農業諸地域および原料諸地減ないし工業的低開発諸国および（または）一面的に発展した諸国へ分かれていることから明らかである。」²⁰⁾「論拠の第二は、資本一般の国際的移転が国境内部における移転よりも多くの障害を課されているという事実から推論できる。」²¹⁾

生産価格を問題としたときにおいても、生産力の高い国の商品は、世界市場においてその価値以上の生産価格を、生産力の低い国の商品はその価値以下の生産価格を実現し、国際貿易を通じて価値の無償移転が、不等価交換が行なわれるということができる。この点にかんし、マルクスはつぎのように書いている。「対外商業に投下された資本が高い利潤率を生ずるのは、けだし、この場合には第一に、生産能率の低い他国によって生産される商品との競争が行われるからであり、かくして、より進歩した国は自国の商品を——競争国より安くではあるが——その価値以上に売るからである。この場合には、より進歩した国の労働が高い比重をもつ労働として利用される限りにおいて利潤率が増大するのであるが、それはけだし、質的により高い労働としては支払われない労働が、かかるものとして販売されるからである。同じ関係は、そこへ商品が送られ又そこから商品が買受けられる国に対しても生じうる。すなわち、その国はそれが受けとるよりも多くの対象化された労働を現物で与えるという、しかもその国はそれが自ら生産しうるよりも安く商品を受けとるという、関係である。それはあたかも、新なる発明が一般化する以前にこれを利用する工場主が、彼の競争者よりも安く売りながら、しかも彼の商品の個別価値以上に売り、かくして、彼によって充用される労働の特別に高い生産力を剰余労働として利用し、

19) G. Kohlmey: *a. a. O.*, S. 56.

20) G. Kohlmey: *a. a. O.*, S. 57.

21) G. Kohlmey: *a. a. O.*, S. 57.

もって超過利潤を実現するのと同様である。」²²⁾

もっともこのことは、生産力の低い国もまた貿易を通じて相対的には利益しているということを否定するものではない。生産力の高い国もその低い国も、比較生産費説が明らかにしたように、輸入を通じて利益しているのである。比較生産費説は、貿易を本来バーターとみることから、この利益を社会生産物の増加としてとらえたが、貿易が資本家的商品交換であるかぎり、それは社会生産物の増加としてでなく、利潤率の上昇とみななければならぬ。マルクスはその問題については、つぎのような示唆に富んだ言葉を残している。「対外商業が部分的に不変資本の諸要素を低廉化させ、また部分的に生活必需品——可変資本が転化さるべき——を低廉化させる限りでは、対外商業は利潤率を高める作用を有する。けだし、それは剰余価値率を高め、かつ不変資本の価値を減少させるからである。対外商業が総じてこの意味に作用するのは、それが、生産の規模を拡大させるからである。かようにして対外商業は、一面では蓄積を促進するが、他面ではまた、不変資本に較べて可変資本の減少を、したがって利潤率の低落を促進する。同様に、対外商業の拡張も、資本制生産の幼年期にはその基礎であったが、その進展につれ、この生産様式の内的必然性によって、市場のたえざる拡張を求めるその欲望によって、それ自身の生産物となった。ここに再び、作用の同じ二者闘争性があらわれる。(リカードは対外商業のこの傾向をまったく看過した。)」²³⁾

リカードは貿易をバーターと考え、商品交換とくに資本家的商品交換と考えなかったため、社会生産物の増加が、資本主義社会においては、資本の蓄積として現われねばならぬことを明らかにしえなかった。したがって外国貿易は、一方では利潤率を高め、失業を減少せしめ、資本の蓄積をおしすすめる作用をもちながら、他方において、生産規模の拡大を通じて、より人なる規模の利潤率の低下と失業の発生の原因となるという、資本蓄積と外国貿易の関連を明ら

22) マルクス『資本論』（日本評論社版）、第三卷第二分冊、188頁。

23) 同上、187頁。

かにすることができなかった。

VII お わ り に

すでに指摘したように、これまでわたくしは幾度か国際価値論について論じており、この論文は、これまでの論文と重複する個所が多い。しかしこの論文が新しく展開した点は、次の諸点である。

第一に国際価値論の研究は、木下教授の『論争・国際価値論』で明らかなように、主としてわが国だけでおこなわれたものであり、いわば鎖国的なものであった。わたくしはここでコールマイの論文に言及し、この問題がひとりわが国での問題であるだけでなく、国際的なものであることを明らかにした。コールマイの論文には、社会主義諸国の多くの学者の説が取上げられており、国際価値論は、マルクス経済学において、確固たる地位を占めていることは明らかである。わが国の経済学者の一部には、国際価値論の重要性を否定し、価値論一般の変形にすぎぬものであるとしてきたものがあったが、それらの人は、いまにしてその不明を恥づべきである。

第二にこの論文では、物々交換を仮定して論じられた比較生産費説に貨幣を導入した。これまでとても、貨幣導入の試みは幾度か試みられているが、それらの試みは、リカードの比較生産費説との関連が不明確であった。この論文の特徴は、リカードの設例をそのまま用いながら、スムウズに貨幣導入の試みがなされている。物々交換の仮定の上でなされた比較生産費説に貨幣を導入することは、測り知れないほど重要な意義をもっている。それによって、現代の国際通貨危機の可能性が導き出されるのである。

第三に国際価値の考察を通じて、国際市場価値の概念の重要性を指摘している。社会主義諸国の学者のなかにも、世界市場価格決定の基準として、国際価値に言及している学者がかなり多いが、この見解は誤りでないまでも不正確である。国際価値が世界市場価格の基準になるというとき、それは市場価値でなければならない。

第四に世界市場では、国際生産価格形成の傾向が微弱であることを明らかにした。世界市場においては、資本移動が、国内市場におけるほど活潑ではないからである。そのいみにおいても世界市場価格の基準は、国際市場価値に求められねばならない。